

二〇一三年三月一九日(垂水なぎさ街道参加者一五名)

各停の電車に揺られ春眠し	ひかり
のどけしや沖の巨船の遅々として	"
海へ向く朱の大鳥居春日燦	"
浜風にのりていかなご炊く匂ひ	"
岬に佇ち春光の海パノラマに	小袖
若布屑競り場を流す水に消ゆ	"
春の水奏でて注ぐピオトープ	"
潮の香に誘はれゆく春岬	"
浜長閑干されしままの漁網かな	よし子
航跡の白一文字春の潮	"
つちふるや海と空とのけじめなく	"
春の波寄せては返す岬鼻	菜々
春告鳥恋人岬への道に	"
国生みの島へ八重なす春の潮	"
強東風の恋人岬人を見ず	はく子
国生みの島を指呼なる春岬	"
口開けて並ぶ蛸壺浜日永	"
大橋も下航く船もおぼろかな	せいじ

春風に乗りて高鳴る鳶の笛	"
日の斑洩る稚魚の溜りや水温む	わかば
いかなごの匂ひの洩るる蟹の路地	"
風光る船銀座なる須磨明石	有香
干されたる魚網に絡む桜貝	"
恋誓ふ鍵あまた吊る春岬	よう子
春の波テトラポットを洗ひをり	きづな
ピオトープめぐる一步に初音かな	満天

吟行句会みのる選

二〇一三年三月一九日(垂水なぎさ街道参加者一五名)